



ジヴェルニー印象派美術館（平松礼二「睡蓮の池・モネへのオマージュ」展の公式ポスターの一枚



日本画家・平松礼二さんの一大個展が、現在、フランスのジヴェルニー印象派美術館で開催されている。現存の日本人画家の企画展がフランスの公立美術館に招致されるのはきわめて稀、加えて出品作すべてが描き下ろしの新作・美術館買上げとなるなど、その内容は異例づくしだ。敬愛するモネ『睡蓮』との出会いから20年。そんな巨匠をも魅了したジャポニスムを独自に探求、夢の競演を現実のものとした画家の記念すべき晴舞台。展覧会実現までの経緯を綴った自身の執筆、同行識者による現地レポートなどを加え、その全貌と見どころを一挙紹介。

ジヴェルニー印象派美術館入口で、ディエゴ・カンディール館長と平松礼二氏。



in ジヴェルニー印象派美術館

《平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ》

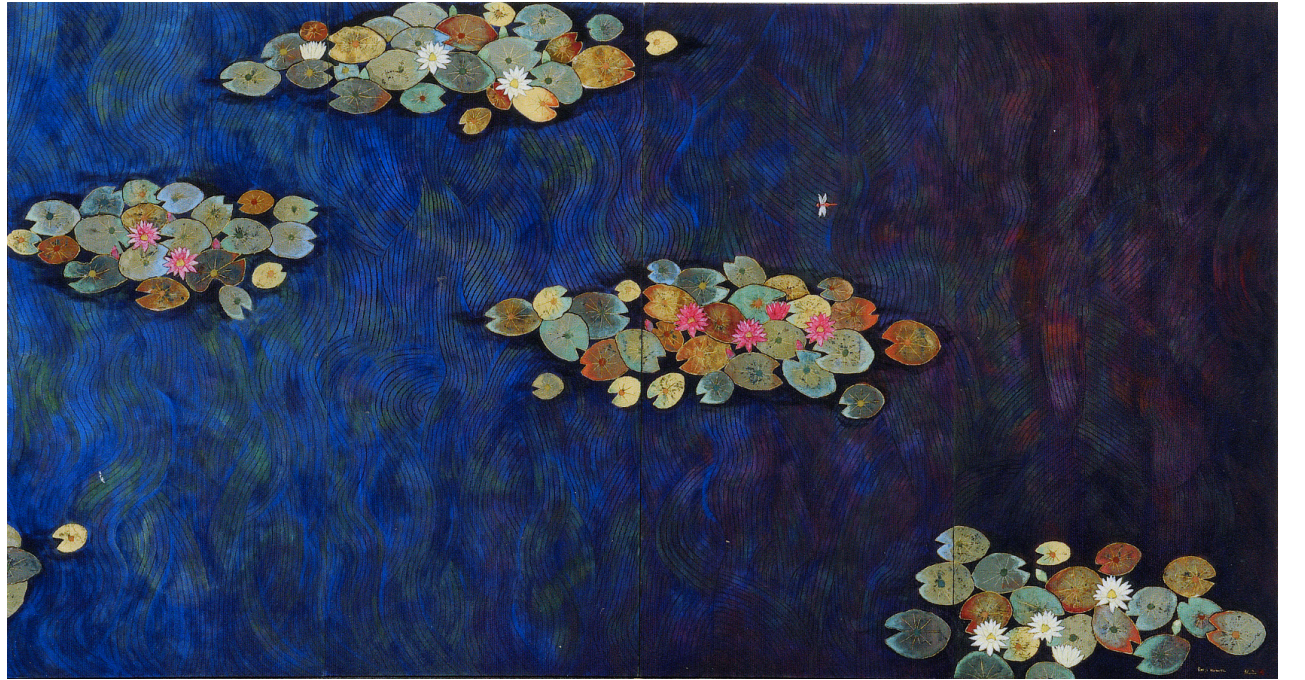
musée des impressionnismes giverny

normandie impressionniste

2013年7月13日 - 10月31日

平松礼二

睡蓮の池
モネへのオマージュ



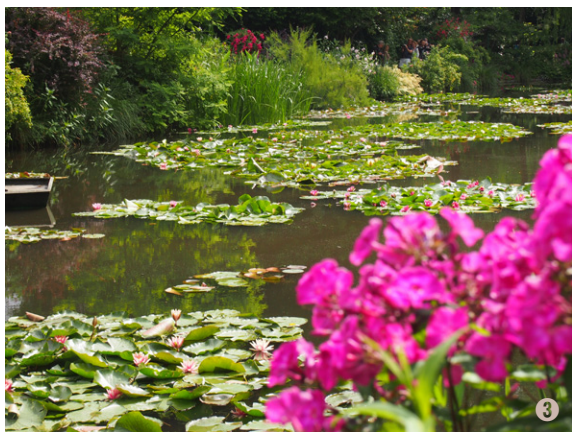
水と樹と睡蓮の交響楽 180×680cm 四曲一双屏風 2011年

ジヴェルニーは、想像していた以上に、簡素で小さな村だった。「平松礼一・睡蓮の池・モネへのオマージュ」展が開かれているフランス北西部、ノルマンディー地方にあるジヴェルニーは、かつてモネが後半生を過ごし、連作《睡蓮》を生んだ、印象派の聖地、とも呼べる場所だ。1994年にパリのオランジュリー美術館で《睡蓮》の大作を見て以来、印象派・ジャポニスムへの旅を続ける平松が描いた渾身の作品が、**「聖地」に並んだのである。**展覧会終了後は、25点の作品すべてが企画した同美術館に買い上げられ、そのコレクションに加わる。壮挙と言っても過言ではない。集大成と見まがうばかりの圧巻の展示に、ホッと一息かと思いきや、「次作はイワシ雲をテーマに決めました。帰国したらさっそく取り掛かるつもり」と画家は声を弾ませた。

ルポルターージュ

「印象派の聖地」に並んだ新作
《平松礼一・睡蓮の池》
 モネへのオマージュ展を見て

石川健次



①パリから車で約1時間、「モネの館」のほど近くに建つジヴェルニー印象派美術館。②③④モネが他界するまでの40年間を過ごした「モネの家」と自慢の庭園。展覧会開幕を前に多くの観光客で賑わう。

フランスに到着してすぐに平松と行動を共にする機会に恵まれた私は、開幕を目前に「モネの館」を訪ねた平松に同行した。パカンスのシーズンを迎えた庭は、観光客でごった返していた。微笑を浮かべ、行き交う人々の間をゆっくりとぬうように歩く平松の背を追いながら、20年前にはおそらく想像もしなかったはずの本展にさぞかし感慨は深いだろうと思った。

ちょうど池にかかる太鼓橋の辺りで聞いてみた。「いよいよですね」。普段なら十分過ぎる言葉が返ってくる平松が何もしゃべらず、ただうなずいた。笑顔とは裏腹に、大舞台の前に緊張していたのだろうか。それとも、歩んできた印象派への旅の軌跡に思いは遠く飛んでいたのかもしれない。



春の風・モネの池 162.1×112.1cm 100P 2011年

フロアグーモネの庭で

パリから西へ車で約1時間、セーヌ川沿いにトウモロコシ畑や牧草地が広がる、のどかなたたずまいの村がジヴェルニーだ。人口約500人、片田舎という言葉がぴったりな感じの小さな村にもかかわらず、世界で最も有名な村と言っても過言ではないかもしれない。印象派の巨匠、クロード・モネ（1840～1926）が43歳の時から亡くなるまでの40年間を過ごした家がある。そのまま保存され、「モネの館」として公開されている。

アトリエやモネが収集した浮世絵コレクション、さらに調度品も当時のまま修復されて展示されているなど、見どころ満載だ。なかでも、モネが自ら丹精を込めてつくり上げた四季折々の草花が咲き乱れる庭園は白眉だろう。オランジュリー美術館で《睡蓮》を見たことをきっかけに始まる印象派・ジャポニスムへの旅のなかで、平松は幾度となくこの庭を訪れ、《睡蓮》が生まれる舞台となった池のほとりに折り畳み式のイスを置き、写生を繰り返した。

この「モネの館」の近くに建つのが、ジヴェルニー印象派美術館だ。フランス北西部のオート・ノルマンディー地方などジヴェルニー周辺の複数の自治体の他、パリのオルセー美術館も管理・運営に関わる公立美術館である。2009年の開館以来、印象派をキーワードに近現代の多彩な展覧会を企画している。モネの知名度や立地の魅力ともあいまって、小さな村には似ても似つかない、フランス有数の美術館である。

⑤一般公開を翌日に控えた展覧会場。⑦⑧展覧会に先立ちパリの日本文化会館で行われた講演会は満席。



5



6



7



8

盛大なレセプションなど並々ならぬ力の入れようは、何より本展へ寄せる期待、平松芸術に触れる喜びの証しにほかならない。ジヴェルニー印象派美術館のディエゴ・カンディール館長も、「まさにその通り」と強い口調で私に語った。平松の作品と出会うまでは、印象派に影響を与えた日本の美術、その歴史にカンディール館長は関心こそあっても、十分な知識はなかったそう。出会いを機に現代の日本画を深く研究し始めた。

印象派に触発され、モネとの創造的応答のなかで創作する平松の作品に、印象派との類似や相異を発見する。「例えば、モネ以上に装飾的でデザイン的。まるで切り絵のように平面的なのも興味深い。卓越したテクニクは神秘的にも映るけれど、作品は平明ですぐにその世界へ入ってゆける。現代日本画の魅力に圧倒され、ぜひ私の美術館で個展を、と考えました」。平松にとっても、印象派をキーワードに掲げる美術館にとっても、その出会いは幸運だったと言えるだろう。「理屈抜きに美しい」「印象派が日本美術に大きな影響を受けたのは、よく知っている。でも、その印象派に影響された現代の画家が日本にいないの、どこかミステリアス」。会場で私の耳に届いたさまざまな声、印象は、いずれも平松芸術の特徴や魅力を言い得ていたように思う。

ノルマンディー地方ではこの夏、「第2回ノルマンディー印象派フェスティバル」（10月末まで）が開催されている。地域を挙げて印象派に関するさまざまな催しを開催し、活性化に役立てようという試みだ。3年前の第1回には、期間中に100万人を超える来場者があった。フェスティバルの一環に数えられる本展は、6大展の中で一番の目玉と聞く。



冬の池・ジヴェルニー 116.7×80.3cm 50P 2011年

分かりやすいのに、ミステリアス

展覧会の開催に先立って、パリの日本文化会館では「ジャポニスムの婦郷 平松礼二の世界」をテーマに平松の講演会が開かれた。用意された百数十席はあっという間に埋まった。同会館のマネリ果林さんによれば、事前に予約を募った際には定員を上回る応募が集まり、仕方なく断った人も多くいたそうだ。

作品を映像で紹介しながら、それらに込めた思いや制作中のエピソードが披露された。「油絵のように世界性のある画材ではなく、島国日本の表現です」などユーモラスな語り口に会場は時折笑いに包まれ、熱心にメモする人の姿も多く見られた。会場の片隅では日本から運んできた画材が展示され、講演終了後には見慣れない岩絵具や膠など日本画特有の画材を直接手に取って、興味深そうに見つめるパリっ子の姿が多く見られた。矢継ぎ早の質問にも丁寧に答え、握手を交わし、平松にはまさに汗だくの2時間余りだっただろう。

さて、いよいよ開幕だ。一般公開を明後日に控え、日仏の政府や自治体の関係者など本展の実現へ向けて協力した主催者側、あるいはジヴェルニー印象派美術館と関わりが深い人たちへの公式レセプションから展覧会はスタートした。翌日には、やはり一般公開を前に地元や遠く日本からの招待客のためのレセプションも行われた。両日とも、美術館3カ所のレストランで盛大に催された。

折しも、ジヴェルニーをはじめ、ルーアンやル・アーブル、カンなど印象派にゆかりの場所が多い



睡蓮の池 116.7×80.3cm 50P 2011年

にぎやかなレセプション

それにしても一般公開を前に行われたレセプションはにぎやかだった。日仏政府や自治体の関係者を対象とするレセプションにはフランスの政府高官をはじめ、小松一郎・駐フランス日本国大使ご夫妻、OEC D吉川大使ご夫妻や在ドイツ日本国大使の中根猛ご夫妻、オルセー美術館学芸長でモネ研究の第一人者として世界的に知られるシルヴィ・バタンさんなど、連夜開催されたレセプションには各界からさまざまな人が訪れ、平松芸術と深く触れ合い、歓談した。

あいさつに立った小松大使は、日仏両国の歴史的な関係を踏まえて、「モネにインスピレーションを与えた日本の浮世絵が印象派という流れを起す一因となったのはご存知の通りです。それに応えるように、フランスの文化は工業から美術に至るまで日本のいろいろな分野で、近代国家の輝きを与えてくれました。日本の美術は印象派と接触することで、そのパレットをより豊かに、新しい道を広げることができました。その豊かな日仏間の交流が今、平松礼二画伯によって再び確認されたのです」と、開催意義にも触れながら本展の魅力を話した。

肝心の出品作品について、書いていなかった。会場には、『夕映えの池―睡蓮序曲』や『色彩のカルテット・睡蓮』、『水と樹と睡蓮の交響楽』の3点の大作屏風をはじめ、本展のために平松がここ2、3年をかけて描いた新作の本画25点に加えて、愛知県の刈谷市美術館に寄託されている屏風

《ジヴェルニー・モネの池・風音》(1998年)のほか、モネの油彩画やデッサン、さらにモネが収集した浮世絵・絵本のコレクションから傑作20点余りが並んでいる。

モネの作品やモネが集めた浮世絵版画などと一緒には平松の作品が展示されていることで、カンディール館長が話した「印象派との類似や相異」を知る絶好の機会ともなるだろう。「西洋の人々に、この偉大な日本の芸術家の豊かな作品」(本展図録)を楽しんでもらうと同時に、「この現代の画家によるクロード・モネへのオマージュ」(同)を感じ取ってほしいと願う本展監修者の小山ブリジットさん(武蔵大学教授)の思いがにじんでいるだろう。

レセプションでは、モネの庭を再現し、維持・管理を行っている造園家で、モネ財団顧問のG・ヴァエさんにも会うことができた。平松によれば「モネが愛した庭を寸分違わずに再現する職人魂の塊のような人」で、平松が長年尊敬する友人だ。「庭の維持・管理に一番大切なことは？」と聞くと、「水と情熱としっかりした目的」とすぐに答えが返ってきた。「しっかりした目的とは？」とさらに尋ねると、「庭は自然で生きものです。力が及ばないこともあります。ただ、モネの精神にかなうように最大限心がけています」。できないことや失敗もあるのだろう。でも、モネの心に背く行動はしない、自分に嘘はつかない、甘やかさない。そのような強い思いが伝わる。力まず、媚びず、古武士然とした風情には、どこか平松が重なって見える。自分に嘘はつかない、甘や

かさなしいは、平松の心根にも重なるように思う。ヴァエさんを通して、平松の心奥にも触れた気がする。

変化し、進化し、深化する平松芸術

会場では平松自身による記者発表の説明会が行われた。作品の前で、それぞれに込めた思いや裏話を平松が披露した。例えば、池に浮かぶ睡蓮の周りに、池の周辺に生えている樹木が映る『水と樹と睡蓮の交響楽』。「画面左の緑が右へ視線を移すに連れて青く、濃く、そして茶色になってゆきます。1枚の絵の中に、数か月にわたる時の移り変わりを描き入れました」。『色彩のカルテット・睡蓮』では、「春と秋が同居しています。欲張りなのです」。

ゆっくりと、ユーモアを交えながら語りかける。朱色の水面が印象的な『夕映えの池―睡蓮序曲』の前では、「この朱色は、日本では神社の鳥居などでよく見かけます。高貴な色です。画面左下の白い鳥は、モネから100年後にジヴェルニーに飛んできた私です」。『冬の池・ジヴェルニー』では、「冬を描きました。寒そうに鳥が飛んでいます。でも、いつか春が訪れます。苦しみの先にある喜び、生まれてくる命、明るい未来への期待を込めました」。会場には、展示作品を描く際に平松が実際に用いた画材や技法を紹介するコーナーも設けられ、熱心に見入る人の姿が多く見られた。見慣れない素材、技法に、やはり興味津々のだろう。本展を担当した学芸員のバネッサ・ルコントさんも「素材や技法から日本画を理解することにも心がけま



9

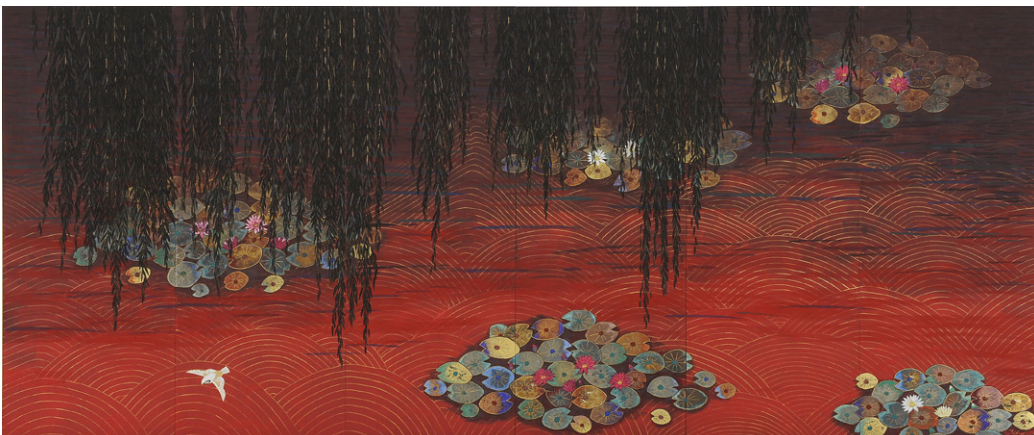


10



11

9 小松一郎・駐フランス日本国大使(右端) 他駐在大使らが集ったレセプション。中央は平松礼二。10 筆者のインタビューに答えるカンディール館長(右)。11 モネの庭の再現に長年尽力したG・ヴァエ氏と。



夕映えの池-睡蓮序曲 180×420cm 六曲一隻屏風 2011年



色彩のカルテット-睡蓮 180×420cm 六曲一隻屏風 2011年

した。私自身、知らないことが多くて、たくさん学びました」と、フランス人にはなじみのない画法だけにいろいろ工夫したと明かす。質問や疑問も、画法に関することが多いようだ。「個人的には、カエルやトンボなど小さな生きものが、自由に、生き生きと絵の中を飛び回っているのが好きですけれど」。

素材や技法をめぐって、あるいは印象派や印象派が影響を受けたジャポニスム（日本趣味）など、日仏の交流や歴史をめぐる文脈を参照しながら本展を楽しむ、理解しようとする向きや声は、とりわけフランス人の間では少なくなかったように思う。「モネへのオマージュ」と本展のタイトルにも掲げられているように、そうした視点が重要なもの言うまでもない。しかし、「安易にモネと比べて、モネを中心に置いて平松の芸術を見るべきではありません」と、オルセー美術館学芸長のパタンさんは言う。

モネ研究の第一人者が私のインタビューに答えて最も強調したのは、その点だった。素材や技法、日仏の交流や歴史に過剰に目を奪われるべきではないという指摘である。「モネと同じく睡蓮や池を描いているけれど、モネのコピーではありません。なるほど平松の絵の中には、モネのエスプリを感じます。でも平松はモネとは明らかに違う見方をする画家です。お世辞でもなんでもなく、いい作品なのです」。偏らず、素直に作品に向き合ってほしいとの思いが、パタンさんの言葉にはあふれていたように思う。

まさに同感だ。平松はモネを真似たのでも、モネを前提に改良を企てたのでもない。例えば、モネはずだ。「印象派への旅は、まだ終わりませんか?」。返ってくる答えに見当はついていたけれど、尋ねてみた。満面の笑みが、答えを物語っていた。

(東京工芸大学教授・近現代美術史)

ネが愛した睡蓮に限らず、日月や梅、富士山や青海波など古今東西の主題やモチーフ、文様が平松の作品には顔をのぞかせる。それらは、個々の作品によって巧みに準備され、配置され、脚色される。そのような時空を超えた、いわばアレンジメント性は、高度な装飾性やデザイン性、抽象性に加えて平松芸術の特質に挙げられるだろう。印象派は、モネは、平松の発想源となったわけでは毛頭なく、平松のなかに自ずと培われた内的動機を、創造の理念を、そうした特質を、補強する機能を授かった。それら内的動機や創造の理念、特質がいつそう変化し、進化し、深化してゆくのが、平松の芸術なのである。

エピソード「印象派への旅は続く」

開幕早々にパリから大挙してメディアが駆けつけ、テレビや新聞、雑誌に映像や記事が躍ったほか、フリーの美術ジャーナリストが取材した映像と記事がYouTube（ユーチューブ）にアップされているのを、帰国便を待つ空港で見た。「モネの瞑想、静けさ、自然の美しさを、再び私たちに思い起こさせてくれました。きっと人気が出ます」。ロダン美術館コレクション文献管理責任者で、本展に並んだモネの浮世絵コレクションの調査、展示に協力したジュヌヴィエーヴ・エイトケンさんは、展覧会の成功を確信するように私に言った。「フルマンディー印象派フェスティバル」との相乗効果で、本展が今夏の話題に、とカンディール館長は期待を膨らませている。だろう。

滞在中、印象派の軌跡を改めて訪ねた平松とともに、パリをはじめ、モネの傑作《ルーアン大聖堂》で知られるルーアンや《印象、日の出》の舞台となったル・アーブル、印象派の画家たちがこぞって描いたエトルタなど各地を歩いた。パリで、平松が印象派への旅を始めるきっかけともなったオランジュリー美術館の《睡蓮》を見た直後のことだ。「今回、ジヴェルニーに着いたその日、空いっぱい広がるイワシ雲を見ました。唐突に平松が話しかけてきた。その時の話を要約すると、こうだ。——《睡蓮》に描かれているイワシ雲がずっと気になっていた。実は、葛飾北斎の《富嶽三十六景 凱風快晴》（赤富士）に登場する空いっぱいのイワシ雲も気になっていて、いつか描きたいと思っていた。でも、ただのイワシ雲では面白くない。私にしか描けないイワシ雲のイメージが、なかなかできない。何度も訪れたジヴェルニーで今回初めて、空いっぱいのイワシ雲を見た。その時ふと、イメージが浮かんだ——。《睡蓮》、《富嶽三十六景 凱風快晴》、そして自分の目で実際に見たジヴェルニーの空いっぱいに浮かぶイワシ雲、これら3つがびったり重なった瞬間、描きたいイワシ雲のイメージが脳裏に浮かんだと言うのだ。さらに続けた言葉が、冒頭で紹介した「新作はイワシ雲をテーマに決めました。帰国したらさっそく取り掛かるつもり」である。いかにも平松らしいと思う。かつて私も参加したトークショーで、若い頃を振り返って平松は「ともかく描いて描いて、また描いた」と話した。画家である平松が自分に嘘はつかない、甘やかさないと言う時、貪欲に描き続けることは証左となる



⑩ 展覧会担当学芸員のパネッサ・ルコント氏
⑪ モネ研究の第一人者、オルセー美術館学芸長パタン氏への取材

ジヴェルニー印象派美術館
《平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ》

ジャ・ポニスムの帰郷、 夢の競演への道

平松礼二

一つの出会い、 事のはじまり

12年も前のことだが高知県の室戸岬に近い北川村でひとりの日本人女性と出会った。日本人と表現したのには理由がある。着物を着ておられるのだがなんと立ち居ふるまいが直感で外国風に感じられたからだ。威厳のある大柄なフランス人男性と一緒であった。聞いてみると彼女はフランスに30年以上も住む通訳さんであることで合点がいった。フランス人男性と名刺交換をして驚い

た。あのパリの知の殿堂、フランス芸術アカデミー（学士院）の終身理事であるA・ドートリーヴさん。彼女の名はカズコ・マルヤマさんで職業は通訳。以来家内共々妙にウマが合って仲良くなった。

お互い自邸に花を育てることが大好きで農作業も厭わない。それでもって適当にお酒もイケルクチで人情味たっぷり。仕事で来日されると鎌倉の家にも立ち寄って下さる。ある日彼女から私の画集がほしいのだが送ってくれる？ と電話があった。何も知らないまま彼女へのプレゼントとして郵便局から小包で4、5冊送った。暫くの時を経て彼女から連絡が入った。平松さ

を受けた

禍転じて福来たる!!

うまい話があるのだろうか。ウマイ話にはきつと裏がある、クワバラ、クワバラと瞬間思ったのだ。しかし同時にそれを打ち消すような出来ごとを思い出した。私が勉強の為に通っていたジヴェルニーにあるモネ財団の庭師G・ヴァエ氏がご兄弟を連れて鎌倉のわが家を訪ねてくれたことがあった。謹厳実直が歩いていることくの超まじめ人間ヴァエ氏と大の仲良し、きつと浮いた話ではないぞと自分を戒めた。（ヴァエさんは荒廃したモネの庭・池を長年かけて復元し、昨年モネ財団を定年退職し現在は庭園顧問。フランス政府から勲章

なんとも阿呆なことだが私には忘れられない遺産「骨折記念日」がある。2010年10月21日の昼、自宅玄関前に張ってある駐車場の鎖に左足を巻きつけて転倒。いつも鎖の上をハードル競技のようにヒョイと飛びこえていたのだがこの日に限って左足が上がっていなかった。70kgの体重を

載せて凸凹のコンクリート地面に勢いよく膝から落下。目の前が真っ白になり激痛が走る。足がみるみる腫れてくる。あわてて近くの病院に駆けこんだ。

レントゲンの結果くつきりと骨の割れ目がいくつも見える。医師は即座に膝の粉碎骨折で手術をしたら入院二週間ですと。そして筋肉が落ちるので当分の間リハビリに通って下さいという。先のことを考え即手術の方を選んだ。手術直後から電動のリハビリ機が病室へ運び込まれた。ギョコ、ギョコと患者の悲鳴を無視して機械は足を引っぱ



モネの庭で同財団の庭師G・ヴァエ氏と。



展覧会実現のきっかけともなったフランス芸術アカデミー（学士院）の終身理事A・ドートリーヴ氏とカズコ・マルヤマ氏。



鎌倉のアトリエでG・ヴァエ氏兄弟とカズコ・マルヤマ氏。

その日を待った。

個展決定！ モノネとの競演が現実に

2011年1月18日少し早めだったがフランスにいる通訳さんから連絡が入った。至急平松礼二展のコンセプト、自筆で長文の画想、理想、作品数や計画サイズを書いて送信してほしいとのことだった。早速折り返し文書を作成し通訳さんに送った。これらはフランス・ノルマンディー地方セーヌ河沿いの主要公立美術館の会議に提出され検討されるという。

2011年2月11日通訳さんから明るい声で電話が入った。ノルマンディーの美術館会議の結果2013年の夏から秋にかけて数カ月間の会期で平松礼二展がジヴェルニー印象派美術館で開催される決定がなされたという。それは第2回ノルマンディー印象派フェスティバルの6大特別展のひとつとしてとのこと、こうした形に日本人の現存画家が招聘されるのは例がないことと聞いた。この報せを聞いて膝のリハビリ用の砂袋を2kgに格上げし失った左足の筋力鍛錬に励むことになった。ヤッター、ジャポニスムのふるさとでモノネの2人展だ！しかし悩みは深い。

出品作品はデイエゴ・カンディール館長の指定「ジヴェルニー モネの池・風音」（1999・6曲1双―愛知刈谷市美術館寄託）を除き他は全て新作の屏風やタブローで臨みたいとの提案書を出るよと言う。館長のご厚意なので無碍には断れない。3日くらい泊めて頂くことにした。夜、家内がなかなか寝つかない。怖ろしくて眠れないという部屋中の電気を全部つけてしまった。豪華なベッドも高さが60cmくらいもあり、落ちつかなくて寝返りを打った時にベッドから落ちた。W・ガル館長には悪いけどそんな有様で這這の体で近くにある友人の家に逃げこんだ。

翌日印象派美術館を訪問しデイエゴ・カンディール館長、マリーナ学芸部長他と会場見学やディスプレイの説明などのレクチャーを受けた。



ジヴェルニー印象派美術館での打ち合わせ。

手術から10日目、2010年12月8日にフランスからジヴェルニー印象派美術館のD・カンディール館長とアメリカ・シカゴのテラ財団エリザベス館長他が通訳さんの案内で小宅へ来訪されることになった。来訪の内容を事前に聞いていなかったが少しピンとくるものがあった。ひよっとすると個展のことかなあ、と。担当医に一時退院させて下さい、シャパンで乾杯くらいしかいけませんので懇願。医師はガブ飲みしなければいいですよ、私は心が広いのでね、と笑いながら。これが運命の岐れ路になるかもしれないの閃きもあり思わず心の中でバンザイ。もしも固いこと言う医師だったら脱走してやろうと腹をくくっていたものだから少し嬉しい拍子抜けでもあった。

夕方館長一行は小宅へ来訪された。私の作品、資料、画想などを話し合った。話が最後になって館長から、ムッシュ・ヒラマツ、印象派美術館で個展をしませんか、と切り出された。迷わず「ウイ、喜んでとお答えした。めでたい約束ができて夕食に向かった。

鎌倉の海岸通りにある民芸風の料理屋さんに行き和食と日本酒で賑やかな夕食会となった。なにしろ刺身や煮物の上をフランス語、英語、日本語が酒の勢いで乱舞する。医師のことはをすっかり忘れてガブ飲みしちよびり反省。宴が終わり館長さんたちを鎌倉駅で見送りそのまま私は病院へUターンしました憂鬱なベッド生活へもどった。

通訳さんの話ではフランスで会議を経、3ヶ月後には正式な結論が出るという。ダメージの大きい足を鍛えなければとリハビリに励みつつ

を求めてみようとも思った。内心ヒヤヒヤでロシア上空かパリで死すか、なんてボンヤリしていた。パリの空港へ着く頃にはどうにか納まってきたのでエイエ、このまま行ってしまえと市内のギャラリーに顔を出し次の日にはサン・ラザール駅から電車に乗ってヴェルノン、ジヴェルニーに入った。

モノ財団の館長W・ガルさんがモノが住んでいた館に泊まれという。古い、広い、大きい、ゴージャスだ。しかし人っ子ひとりいない邸内は不気味だ。庭師のG・ヴァエさんによると夜はお化け



モノ邸でくつろぐ平松氏。このあと恐怖体験が……。



展示会場となるジヴェルニー印象派美術館を望む。

り動きつつづける。入院したら描きかけの大作の進め方をドローイングしようと病室へ持ちこんだ画材のことなんかこの痛さで吹きとんだ。それから私を親子ほど年齢の違う理学療法士に私を鬼と思っして下さい、なんて言われ、アー、ヒェー、ギャー、イテューと悲鳴を上げながら苦痛そのもののリハビリに励んだ。

提出している。一般的に日本画の屏風や大作はパネルを床の上に置き「乗り板」を渡してその上に乗り、しゃがみこんで描く。膝を手術して半年も過ぎれば現場復帰は出来そうだとの見通しは大いに甘かった。足が痛くて曲らない。足の筋肉が固まってしまい正座など到底出来そうもない。それでもGOサインが出て描きはじめねばならない。

一計を案じて事務用の折りタタミテーブル8脚とキャスター付の椅子をアトリエに運び入れた。屏風の出来上がりでは描けないのでばらのパネルに雲肌麻紙を貼りテーブルの上にズラリと並べた。床からテーブルまでは高さが70cmもあるのですからし込みなどの技法ができず苦勞したもの、座ったまま椅子を動かしてテーブルの回りをグルグル動きながら描いた。日頃の制作方法と大分違うので心中「反則」だなんて思いつつもしっかりと描き込んだ。

モノネ邸での恐怖の一夜

2011年6月フランス・ジヴェルニー印象派美術館での現地打ち合わせに向かった。鼻唄まじりで羽田発の機内。好事魔多し、予想もしなかったトラブルが発生。3〜4時間過ぎた頃ビールを飲みすぎたのかなあ、とトイレに立った。正面見つめて用を足すと、愕然、真っ赤に染まっている。それまで自覚症状もなかったし1〜2年ごとに人間ドックに入っている。どうしたんだろうとボンヤリ席にもどった。何度も出血したら機内で救い

の麦酒は格別おいしかった。

想像を超えた

国際プロジェクトに発展

大量の大きな作品を制作するために作った長野県の画室で悪戦苦闘しつつも予定作品は順調に仕上がってゆく。ここまではなんとか私と通訳さんとで進められてきたがこれからが大変。作品のデータを印象派美術館の広報担当やカタログ編集の学芸員に送り、詳細なやりとりをせねばならない。そして国内での広報や執筆依頼、フランスでの講演会やワークショップの企画、応援団や関係者のツアーづくり、公式行事や答礼宴の準備等々は私の処理能力をはるかに越えている。親しい友人、知人に実行チームをお願いすることにした。皆さん多忙の処をこころよく引き受けて頂いた。

1999年に東京発で全国展開した「印象派・ジャポニスムへの旅―日本画家の視線」のディレクターをして頂いた土肥直彦さん（現・㈱S&D社長）に事務局をお願いし、学芸担当にフランス人の小山ブリジットさん（日本美術の研究者・武蔵大学教授）、石川健次さん（東京工芸大学教授）、故郷名古屋の親友・安井善宏さん（明治電機工業（株）会長）、後輩の加藤満憲さん（㈱日本音楽出版社長）、樋口裕嗣さん（愛知大学常務補佐）に加わって頂けることになった。これで懸念の事務処理がターボエンジンの如くこころよく進むことになった。

はじめは印象派美術館と私のささやかな展覧会と思いきり広がったが次第に拡大、拡張されこの企

焼酎で気合、 歴史的調印式

2011年9月30日D・カンディール館長が来日されることになった。私の回顧展が出身地の名古屋市美術館で開催されている。会場全体を見て頂いたあと地下の収蔵庫にあらかじめ用意して頂いたジヴェルニーへの出品作の一部をご覧頂いた。館長に喜んで頂いたのでほっと一息、緊張の糸が緩んだ。

その夜夕食のために予約しておいたしゃぶしゃぶ料理の有名店「木曽路」へ向かった。

カンディール館長と通訳のマルヤマさん、私と家内にもうひとり、立会人として名古屋美術館の深谷克典学芸課長にも加わって頂いた。なぜならここで平松展の開催契約の調印儀式が予定されていたからだ。館長はカバンをあげ徐に書類を取り出した。通訳さんに訳して頂いた上で気合を入れる為焼酎をググッとあおった。両者が万年筆で署名した。

これで20年来の夢と希望であった印象派の一員に加えられたと思うとゾクッとふるえ、廊下に出て何度も深呼吸をくり返した。

たしかに契約書には平松の作品をコレクションする、展覧会の費用や交通費も全て美術館が負担すると書いてあった。まさに夢のまた夢、頬を何度も抓ってみたが痛い！



来日したジヴェルニー印象派美術館カンディール館長（前列中央）。

ちようどポナール展を開催中で作品の展示方法、照明、室内外のディスプレイなど展示効果を高める工夫が随所に見られ、さすが芸術の国フランスだなあ、と感心した。十分な打ち合わせを済ませて帰国し、その足で往路の機内で起きたアクシデントを調べて貰いに病院へ走ったがCT検査の結果大したこともないようでひとまず安心。その夜

画は国家機関に及んでいて目をシロクロ。

2012年2月19日フランス国外務大臣特別顧問レイ・シュバイツァー氏が来日され日本とフランスの文化交流事業に参画する文化芸術界の諸兄姉7人と意見交換の席に参加（国際交流基金）。3月8日に恵比寿の日仏会館ホールで実行委員会主催による記者懇談会を開催。

6月7日駐日フランス大使クリスチャンマセ氏の推薦により国賓として来日されたフランス大統領フランソワ・オランド閣下との懇談会に出席。ジヴェルニー印象派美術館ではフランスでの広報活動も始まったしカタログ編集も山場を迎えた。日本語、フランス語両刀使いの小山ブリジット教授の獅子奮迅の活躍で日本美術の流れ、寄稿者のフランス語訳や編成作業が印象派美術館平松展担当の学芸員バアネッサ・ルコントさんとの間で論文交換の作業も残り150頁余の学術研究者のよくな充実したカタログがまとまった。私にとって過去の例にはなく、満足した感動を味わっている。2013年5月30日出品（買上げ収蔵）予定の作品全てと講演会、会場展示用の日本画材、道具類はコンテナに入り運送会社によりフランスへ旅立っていった。

ジャポニスム探求、 夢の結実

ふり返ってみればあつという間の3年間だった。多摩美大教授時代の上司であられた辻惟雄先生

（当時学長）とはある日短い会話の中で自身の方向性に決定的な助言を頂いた。日本美の精髓・特質は「装飾・アニミズム・遊び心」というような内容だった。そう思いつつ作品を描き進んでいたもののパースペクティブの幻影が常に纏わりついてくる。辻先生のアドバイスでそれが完全に吹っ切れた。

先生からCOキュレーターをされたニューヨークジャパンソサエティギャラリーで刊行された「KAZARI」の資料を頂戴し今も創造、研究上の大切なバイブルになっている。先生からの助言や資料を受けていなかったらきっと私の方向性は定まっていなかったし、この計画は実現していなかった。クロード・モネや多くの印象派の画家たちが江戸期の日本美に向けた眼の解析に立ち向かえなかったと思う。

1994年をはじめでのパリ画廊で個展の折ふと立ち入ったオランジュリー美術館で出会ったモネ作の超大作「睡蓮」のシリーズに大きな衝撃を受けたことから始まったジャポニスムの源流を訪ねる研究の旅を長い間続けてきた。

日本におけるこのシリーズのスタート、「印象派・ジャポニスムへの旅―日本画家の視線」の展覧会から現在までずっと1000点余を描き実証することに夢中で過ごしてきた。今年72歳を迎え少し気力も体力も落ちかけたなあと自嘲しはじめた頃、フランスの美術館でこうした国際的な企画を実現して頂いた。

20余年の歳月が決して無駄でなかったと安堵している。

いざ本番、展覧会いよいよスタート！

7月5日パリ・シャルルドゴール空港へ着く。ゲートでG・バアエ氏、カズコ・マルヤマさんの出迎えを受け一路ホームゲレンデのジヴェルニー村へ。妻共々居候先のカズコ・マルヤマ宅へ。スケッチ用具を前回置いていったのでわが家へ帰ったような安堵感。7月6日ジヴェルニー印象派美術館でD・カンディール館長から会場構成やPOP、ディスプレイ、そして収蔵庫に行き展示作品の紹介を受ける。目の前にモネの大作《睡蓮と柳の枝》、《アイリス》、《日本の橋》、デッサンの数々、また北斎広重などモネがコレクションした浮世絵の名作の数々を前にしばし棒立ち。いよいよ展示がはじまる。

7月6日日本から展覧会事務局をつとめてくださった方々が来仏されジヴェルニー村の外れにあるコテージ風の小さなホテルを事務局の定宿としてマルヤマ邸から私と妻も引越す。

7月9日パリへ行き国立オペラ座へ。女性軍はバレエ・シルフィード、見学、男性軍は天井画のシャガールへ関心が集中。一幕で退場した男性軍は街中へ日本食と麦酒を求めて散策。ある人がパリ地下鉄の駅に平松展の大ポスターがベタベタ貼ってあるので見に行こうと言いつい出立駅へ。本当だった、タタミ2帖分くらいの大ポスターが2枚ある。聞くと200くらい全ての駅に貼ってあるという。私にとっては前代未聞。遠い国のできごとと呆然。

7月10日パリ日本文化センターホールで講演「ジャポニスムの帰郷」と日本画材と技法のワー



池に金色の雲映る 116.7×80.3cm 50P 2011年

今回の展覧会の実現に向けてお骨折りを頂いた方々に社名・団体を記し感謝の意を捧げたい。ジヴェルニー印象派美術館、モネ財団、マルモッタ美術館、パリ リセ モネ、刈谷市美術館、駐仏日本大使館、駐日仏大使館、国際交流基金、パリ日本文化センター、東京日仏会館、アメリカテラ財団、ANA全日空(株)、愛知大学、近畿日本ツーリスト、カズコ・マルヤマ氏。

*

7月25日始まったばかりの平松展にうしろ髪をひかれつつフランスを離れた。

7月21日今日で公式の行事は終わった。もう一度ジヴェルニーの印象派画家たちがジャポニスムを語り合った地を歩きスケッチブックを埋めた。そしてモネと後援者となり合わせて眠る墓前に妻と2人でおもむき感謝と報告を伝えた。

7月20日ジヴェルニー印象派美術館の地下にある200人規模の階段教室風ホールで2回目の講演とワークショップの開催。今回は美術館(階上)に作品展示と私の使用画材一式がガラスケースに陳列されているので比較検討して頂くのに十分な機会であった。入場者は殆んどがフランスの方々ではじめて目にし、はじめて手にふれる画材で応対にんやわんや(専門用具の扱い方など)だったが関心が大変高く、主催した館長も熱弁をふるった。私はジョークをいくつも入れて一拍遅れ(通訳の後)でどっと笑い声が湧いたり、大きな拍手を頂いた。出口で館長から、「ヒラマツ サクセス!」。ギュッと握手を求められた。

7月20日ジヴェルニー印象派美術館の地下にある200人規模の階段教室風ホールで2回目の講演とワークショップの開催。今回は美術館(階上)に作品展示と私の使用画材一式がガラスケースに陳列されているので比較検討して頂くのに十分な機会であった。入場者は殆んどがフランスの方々ではじめて目にし、はじめて手にふれる画材で応対にんやわんや(専門用具の扱い方など)だったが関心が大変高く、主催した館長も熱弁をふるった。私はジョークをいくつも入れて一拍遅れ(通訳の後)でどっと笑い声が湧いたり、大きな拍手を頂いた。出口で館長から、「ヒラマツ サクセス!」。ギュッと握手を求められた。

大学教授)の通訳で終了した。

7月12日はもう一つ大きな行事があった。フランス国内及び国外パリ駐在特派員に対する記者会見だった。カンディール館長の案内、解説で(50数社と聞く)フランス国营テレビ(3ch)はじめ、ラジオ、新聞、雑誌、インターネット、ユーチューブ等の取材があり、小山ブリジット(日本・武蔵

はこれで行くか、ウケルか、ひんしゆくかは出たとこ勝負と。以前私の図柄によるキモノ、ユカタ展を開催した画廊に相談するところよくユカタ一式をプレゼントして下さった。これでイチかバチかの大ハブニングが大成功であった。シニャックのように歴史の記録に残るかもね。

二次会は前夜と同じ時刻に同じ会場で。日本からの応援団の一行が突然の大ハブニングプレゼントをして下さった。モネやセザンヌ他印象派画家たちが愛した丘の中腹にあるアトリエから例の車寅次郎「トラ」さんがそっくりさんで登場!そしてスポットライトを浴びながらの大口上でバナナの叩き売り。大喚声に、大笑声。世界の葛飾柴又のトラさんが突然やってきたのだ。これにはきつと天上の印象派画家たちも大爆笑したに違いない。印象派の巨匠たちに大影響を与えた浮世絵師たちのふるさと江戸下町からやってきたのだ。日仏混合の印象派まつりの終りはフランス国歌ラ・マルセーユの大合唱のくり返しで幕を閉じた。

1回目、2回目の二次会も男性和装あり、キモノあり、ユカタあり、タキシードあり、ジーンズありの民族あれこれ、参加された要人たちの皆さんは、こんな自然で楽しいオープニングは初めてだったと後日手紙を頂戴した。

7月12日はもう一つ大きな行事があった。少し前に同館のマリーナ学芸部長(ノルマンディ印象派フェスティバルのシニャック展担当キュレーター)から昔こんなことがあったとシニャックがユカタ姿で刀を振り回している古い写真を私あて送って下さったのを覚えていて、今回のおみやげ

クショップを開催。日本大使館よりの広報が行き届き早々に満員御礼で打ち切りであったらしい。パリっ子にとっては不思議な絵画のようだ。第1回目の主催者オープニングパーティ(夜7時)がジヴェルニー印象派美術館ではじまる。フランス政府の要人、美術館関係者や近隣国の要人、日本政府の要人ら招待客がおよそ300人、3つのレストランスペースとオープニングガーデンはシャン



パリのメトロ構内に貼られた展覧会ポスター。

パンを持つ人々でごった返した。事務局が用意した美術館近くの居酒屋風レストランで二次会。このレストランの裏庭(小高い丘)にはモネやセザンヌが通い、酒代のない人は絵を置いていった処で、いまも小さなアトリエが残っている。アコーディオン弾きと女性歌手がシャンソンや皆さんが知る限りのフランスの古い歌を演奏して下さり、参加者は途中から踊りの輪に。時間は午後10時を回っているのに日没はこない。日本語も、フランス語も、英語も空中で溶け合っただめや、歌えや、踊れ! は世界語で。

7月12日第2回目招待客オープニングパーティ。前夜につづき夜7時から。フランス政府の女性要人のスピーチ、日本大使館のスピーチにつづきジヴェルニー印象派美術館長ディエゴ・カンディールさんのスピーチが終わったところでビックリプレゼントのハブニング。平松展企画者の館長に平松図柄のユカタとオモチャの刀と平松展担当学芸員のバネッサ・ルコントさんにユカタ一式を。壇上の二人に万雷の拍手。館長は腰に差した刀を抜きチャンバラをするように振り回し、フランス語で×□○△。あとで聞くとオレに逆らう奴は切るぞといったか、どうか。それからは庭で記念撮影のオンパレード。

このハブニングにはヒントがあった。少し前に同館のマリーナ学芸部長(ノルマンディ印象派フェスティバルのシニャック展担当キュレーター)から昔こんなことがあったとシニャックがユカタ姿で刀を振り回している古い写真を私あて送って下さったのを覚えていて、今回のおみやげ

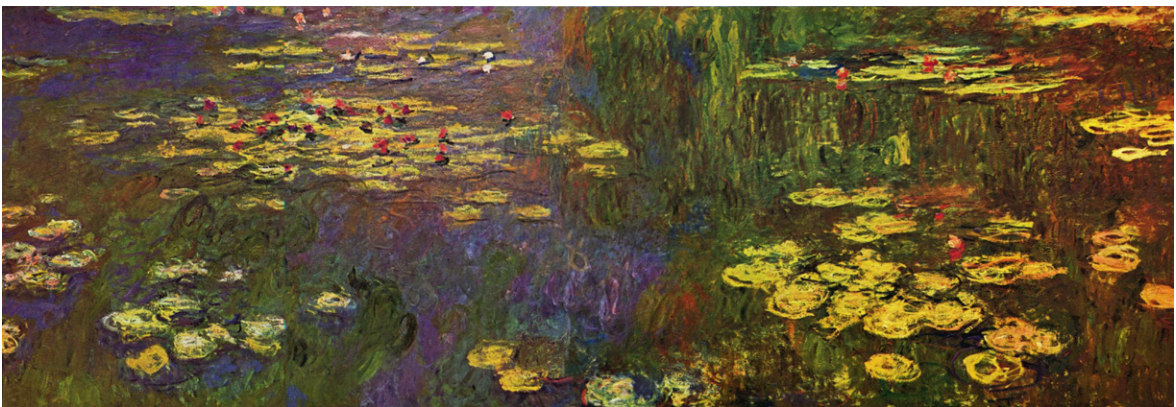
平松礼二

ジャポニスムの探求、 巨匠モネへのオマージュ

小山ブリジット

クロード・モネ『睡蓮』の衝撃

日本画の伝統を受け継ぐ平松礼二が、印象派、わけてもクロード・モネに魅せられるのは、画家としては遅い時期だった。それは、1994年にパリJALギャラリーでの個展のために訪れたパリで、オランジュリーのモネの大壁画を見てからだった。それまでは、これらの絵は、複製でしか見たことがなく、『睡蓮』の発見が、その後の自分の生涯を一変させてしまおうなどとは、思いもよらなかった。魅惑の虜になった画家は、時が経つのも忘れて、これらの傑作の前に、長い間立ち尽くす。まるで、自分が、昔ながらの日本家屋の中で、襖や屏風を前にしているような気がした。突然、平松礼二は、モネが、西洋で用いられてきた遠近法を放棄して、まったく新しい空間を構築していたことを理解する。



ジャポニスム探求のきっかけとなったクロード・モネ『睡蓮』。
キャンバス、油彩 219 × 602 cm 1920-1926年 オランジュリー美術館蔵

は、きらめく光や、開きかける花々、雲を映す水の鏡上の多彩な色模様を観察した。戯れる光を追いかけては、蛇のように草が這う水底を探った。自然の縮図でもあるこの水の作品は、日の光によって昇華され、平松礼二にとって、かつてクロード・モネにとってそうであったように、東の間の一瞬が永遠にして絶対的な美の錯覚を与えることができる宇宙の表現となったのである。

モネを魅了した日本美術

モネがいつ日本の版画を発見したのかは正確には知られていない。作家マルク・エルデル（1884〜1933）に打ち明けたところによれば、16歳の時に、ル・アールの骨董屋で、初めて版画を知ったようだ。さらには、1886年には、アムステルダム陶磁器店でも日本の版画を見つけ、壺の値段を交渉し、店主に、その値段で版画一式を付け加えてくれと注文したとも語っている。その色使いや思い切ったローアングルの構図、複数の視点は、画家を魅了し、絵を描くにも庭を造るにも、多くのインスピレーションを与えた。しかし、画家の創作に影響を与えたのは、版画だけではなかった。19世紀後半には、日本の芸術は、モネばかりでなく、同時代のほとんどの芸術家にとっても、特別な魅力を持ち、それはやがて、ジャポニスムとして知られる芸術運動を生むことになる。まずヨーロッパに、それからアメリカに、怒涛のように打ち寄せながら、ジャポニスムは、芸

術の世界に、長い間待たれていた再生のきっかけを提供した。

モネは、「ジャポニザン」と呼ばれる日本美術に情熱を傾ける人々と付き合い、1880年代に出会った美術商、林忠正（1853〜1906）と、非常に親しくなる。パリのヴィクトワール通りにある林の店の常連客となり、ジヴェルニーにも、何度となく林を招く。印象派を最初に理解した日本人であった林忠正は、いくつかのモネの絵と引き換えに、日本の版画を譲ることに同意した。モネはもうひとりの美術商、林忠正の友人でありライバルでもあったジークフリート・ビング（1838〜1905）の店の顧客でもあった。

エドモン・ド・ゴンクール（1822〜1896）は、その有名な『日記』に、1882年2月17日水曜日の日付けで、次のように書く。「北斎の富士の大判の版画をめくりながら、マンジは私に言った。『ごらんよ、ここに、モネのあの黄色い広がりがある。』その通りだった。私たちが思っているよりは、はるかに多くのものを、現代の風景画家たちは、これらの絵から借りている。とりわけ、モネには、ビングの店で何度も会ったが、いつも、レヴィのいる屋根裏の、日本の版画が置かれてある部屋にいた」

ゴンクールも、画家カミーユ・ピサロ（1830〜1903）や当時の大方の批評家同様、モネの作品における日本美術の影響について書き残しているが、オクターブ・ミルボーに至っては、次のようにすら書いている。「モネは、これまで、ただ日本人のみがその術を知っていたもの、失わ

れた秘密のようなもの、触れることも、捕らえることもできない、敢えて言えば空気のようなものを表現した」

モネ自身もまた、日本の芸術家に対する賞賛の念を、美術評論家のロジェ・マルクスに告白している。「もしも、あなたが、都合上、どうしても私をどこかの流派に分類したいのでしたら、あの昔の日本の絵師に加えて下さい。あの美に対する類稀な感性は、いつでも私を楽しませてくれますし、影によって存在を、断片によって全貌を連想させる美学の提案には、まったく同意するからです」

日本の版画が、ジヴェルニーの家全体を飾り、画家の目を楽しませたとすれば、その情熱は、庭と睡蓮の池に向けられた。1890年6月22日、モネは、ギュスターヴ・ジェフロワに書く。「私には仕事がありますし、当分は、パリに行くことなど、ほとんど考えてもいません。絵画と、庭の花を見ることの喜び、これだけで、十分幸せです。でも、ご存知でしょうが、好きな友達の間を受ける時もまた、幸せになれるものなのです……私は、できそうにないことに手を染めました。水と水底に揺れる草、それを見るのは素晴らしいことです。でも、それを造りたいというのは、狂気の沙汰です。それでも、私は、相変わらず、こういうことに挑戦しています。ここから失礼して、苦役に戻ることにします」

この時から、水の上の光の反映を表現しようとする、飽くことのない画家の試みが始まる。満足することは稀で、モネは、怒って多くの絵を破り



ジヴェルニーの食堂にて浮世絵コレクションに囲まれるモネ。
1915年頃
撮影者不明 Collection Philippe Piguet

たちのように、あるいは架空の海の怪物のように、触手を縮めたり、伸ばしたりしている」
クロード・モネが、睡蓮の池の近くで、30年もの間、白内障と戦い、失明の恐れに脅かされながら、執拗に描き続けた巨大な作品は、オランジュリーの大壁画となって完成する。そして、今度は、平松礼二が、芸術家の心を理解し、敬意を払うために、モネの作品を日本画の画家の手法で解釈し直すこととなる。

巨匠へのオマージュ、東西文化の融合

たとえ「睡蓮」のテーマが二人の画家に共通だったとしても、それを比較することには、何の意味もない。平松礼二は「睡蓮」のコピーを作成したかったわけではなく、ただ、そこからインスピレーションを受けて、異なる画材と異なるやり方で、まったく新しい作品を創ろうとしたからだ。日本画は、油絵との共通点は何もない。それはまた、錦絵と呼ばれる多色摺り木版画とも異なる。モネは、束の間の光とその儚さを、水の鏡に映る空と水生植物の影をつかもうとした。トンボがやってくるまで波を立てる水の表面を、草がからかうようにゆれている、そんな池の底を表現しようとして、長い歳月を費やした。睡蓮の池は、決して満足することのない悩める魂を映していたのではなかったか。それでは、なぜ、平松礼二の作品は、モネの絵と同じ主題、同じ美を持ちながら、これほどまでに異なっているのだろうか。これらの疑問

間に答えるために、筆者の個人的な解釈を書くよりは、ここで、画家自身に語ってもらうことにしよう。
「モネの『睡蓮』の大作をオランジュリー美術館で初めて見たのは、1994年のことでした。大きな衝撃を受けました。これらの画布を縦に折り曲げれば屏風になると思えました。いったい何に駆り立てられて、モネは、絵のモチーフとして、池を、睡蓮を、そのほかの庭の植物を、これほど大きな画布に描いたのか、考えてみました。そして、答えを見つけるために、ジヴェルニーに行くことにしたのです。池の周りを何度も回っているうちに、突然、モネが、池の姿を、江戸時代に女性が愛用した手鏡に似せて設計したのではないかという考えが閃きました。この水の鏡には、空や雲や木々の緑が映っていました。そこには、鉢植えの睡蓮が、等間隔に置かれていました。茎は伸び、葉は水の面に円形に広がりました。真ん中には小さな花が咲いていて、同じ水生植物の蓮とはずいぶん違っていました。睡蓮は、もっと、ずっと小さいのです。これらの魅力的な「飾り」が、池に特殊な美しさを与えていました。モネの視線は、日本美術と西洋美術を融合させるといふ実験に、見事成功していました。そこで、今度は、私が、モネの造ったこの美しい風景を借りて、日本人の視線で、実験的な作品を作ってみようと思ったのです。縦168・5センチ、横708センチの絹張りの屏風を準備して、そこに純金の箔を貼りました。モチーフとしては、池の光、雲、柳、そして睡蓮を選びました。(中略) 日本画の「色」

捨てた。オクターブ・ミルボ、この幸運な目撃者は、どうやってモネが、毎日、同じ時刻に、同じ時間だけ、同じ光の下で、同じ題材を、納得のいく結果がでるまでやり直したかを報告している。「絵の手前は水ばかりで、水面は、時には鏡のように、時には流れるように輝いている。目は、次第に、冷たい波の中に潜り、透明な液体の中を、金色の砂が敷かれた水底まで降りて行き、そこに、水生植物の生活を発見する。水底に生きた風変わりな植物や、筋のある長い水藻が、鹿毛色、緑、緋色と、色とりどりに、流れに身を任せて、まるで柔らかな奇妙な長い髪のように、揺れたり、身をよじらせたり、もつれ合ったり、離れてはまた身を寄せ合ったりしている。かと思うと、今度は、波のようにならぬ、蛇のように這い、不思議な魚

の基礎である墨で、濃淡をつけながら、柳と睡蓮の輪郭を描き、そのあと、鮮やかさの異なる岩絵具を重ね塗りしていったのです。池の光の効果を表現するために、とくに、金を選びました。こうして、私自身の感性と日本画特有の画材を用いて、検証と模写を目的とした実験的な作品ができあがり、『ジヴェルニー・モネの池・風音』という題をつけました。そのあと、第二の実験を試みました。テーマは睡蓮の装飾的な姿で、これをさらに輝かせたいと思ったのです。単色の緑をやめて、そこに白金や銀、青銅などの金属箔、真珠母、赤貝の粉末など、日本の伝統の色である天然の素材を加えました。すると、画面全体が装飾的になり、中世の作品に近づいてくることに気づいたの

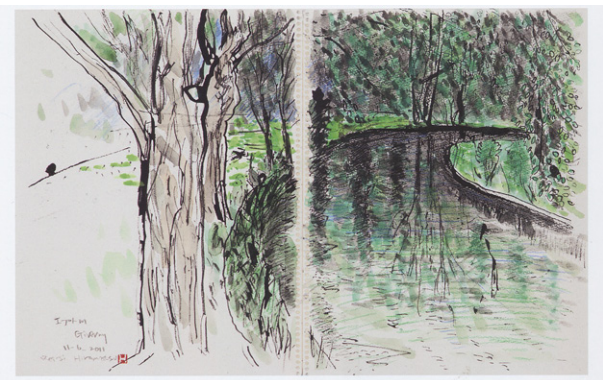
です。この美しさは、私が何よりも大切に思う日本と西洋の歩み寄りから生まれたものであり、新しいジャンルの『睡蓮』の誕生とも言えるものだった」

「東洋と西洋の間のみならず、そのほかの国々の芸術にも関心を持ちながら、これらの文化の融合する作品を創造したいと願ったのです。クロード・モネは、文化の違いという研究テーマを私たちに残してくれました。私は、モネに深く感謝しています。日本画でその作品を再現し、実験し、解決策を見つけようとする事によって、私自身の芸術の多くの面を強化する機会を与えてくれたからです」

この展覧会は、西洋の人々に、この偉大な日本

の芸術家の豊かな作品の一部を発見させることになるだろう。モネの絵や日本の版画と並んで展示される平松礼二の作品は、この日本画の巨匠の優れた技術を鑑賞する機会を提供してくれる。ジヴェルニーの村とその周辺の風景、糸杉や麦畑、睡蓮を描いた絵を見る人々は、この現代の画家によるクロード・モネへのオマージュを感じ取ることだろう。時間も距離も、もはや、クロード・モネと平松礼二を引き離すことはできない。ふたたびは美の探求という究極の目的によって結ばれているからである。(武蔵大学教授)

※本テキストはジヴェルニー印象派美術館(平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ)カタログより抜粋



ジヴェルニー滞在中に制作された平松礼二のデッサンの数々。上から
《ジヴェルニー モネの池 柳》
色鉛筆、墨、水彩、竹鉛筆 40.6×64.1cm 個人蔵
《ジヴェルニー円山宅にて、2011年6月11日》
墨、竹鉛筆 32.5×47.5cm 個人蔵
《エプト川 ジヴェルニー、2011年6月11日》
色鉛筆、墨、顔彩、竹鉛筆 32.5×47.5cm 個人蔵

平松礼二プロフィール

- 1941年 9月3日、平松治美、ひさの次男として東京都中野区上高田に生まれる。男3人、女2人の4番目。本名邦夫。
- 1946年 国家公務員の父の転勤で、この頃名古屋に転居。
- 1948年 名古屋市立城北小学校に入学。
- 1954年 名古屋市市立志賀中学校に入学。
美術教師・加藤助八に指導を受ける。
- 1958年 旭丘高校美術課程に入学。3年の時、日本画コースに進級。
日展に所属する美術教師・鬼頭篁の指導を受ける。
- 1960年 青龍社（日本画促進を目的として1922年川端龍子によって結成されたグループ）主催による、第32回青龍展（日本橋・三越）に《廃船》を初出品し、入選を果たす。
- 1961年 絵画制作を続けつつ、愛知大学法経学部に入学。
- 1962年 東京、続いて地方に巡回された第34回青龍展に《開墾地》を出品。
この年青龍社のメンバーとなる。
- 1965年 愛知大学法経学部を卒業。この年の春の青龍展に出品した《廃船食堂》が映画監督の衣笠貞之助（1896〜1982）の目にとまり、同監督の日露合作映画「小さな逃亡者」のセットに使われる。
- 1966年 川端龍子が没し、青龍社が解散。中日新聞に多くの挿絵を掲載。
生活のために高校の美術講師などのアルバイトのかたわら、10月には名古屋・伽藍洞ギャラリーで初の個展を開催。
- 1967年 3月、愛知県出身の赤井裕子と結婚。
- 1969年 後に慶、礼、篤の3男をもうける。名古屋、伽藍洞にて2回目の個展。アメリカ、メキシコに2週間ほど旅行。ルフィン・タマヨ（1899〜1991）やダヴィッド・アルフォンソ・シケイロス（1896〜1974）の作品に強く惹かれる。
- 1970年 夏、中日新聞挿画の取材のために初めて韓国に旅行。

- 1987年 10月、個展「路―東海」（日本橋・三越）を開催。
- 1988年 2月、個展「路」（東京セントラルアネックス）を開催。
4月、毎日1点を制作する、「一日一絵」をはじめ、翌年3月31日まで365点を制作する。
- 1989年 6月〜9月、北京で「中国・北京・故宮光彩」の連作。
第1回MOA岡田茂吉賞優秀賞を受賞。
- 1990年 9月、奥の細道300年記念描かれた道展（宮城県美術館）に出品。
10月、第10回中日展（名古屋市博物館）に招待出品。
4月、山種美術館大賞展大賞を受賞する。
- 1994年 9月「WORKS 365」平松礼二展（東京セントラルアネックス）を開催。
11月、展覧会準備のためにニューヨークへ取材旅行。
6月、日本テレビのルポルタージュと1994年開催予定の展覧会準備のために、ニューヨークに再度取材旅行。
- 1992年 7月、「市制40周年記念 平松礼二展」（刈谷市美術館）を開催。
4月、名古屋を離れ、鎌倉に転居。
6月、個展「路―季節の中で」（名古屋・名鉄百貨店）を開催。
- 1993年 1月、日本橋・三越で個展を開催。
3月、箱根芦ノ湖成川美術館と山中湖高村美術館にて個展を開催。
3月、「平松礼二展」（パリJALギャラリー）を開催。
- 1994年 はじめてフランスに旅行し、オランジュリー美術館にてクロード・モネの大壁画を発見する。
4月、多摩美術大学教授に就任。
6月、「NEW YORK SCENES 平松礼二展」（西武有楽町アートフォーラム他）。8月、「平松礼二展」（名古屋・名都美術館）。
- 1995年 1月、「平松礼二展 獄・その神秘なるもの」（銀座・石川画廊）。
- 1996年 4月、「平松礼二展 ベトナムスケッチ紀行」（銀座・松屋）。
映画「眠る男」（小栗康平監督作品）で劇中の板戸を制作。
7月、名古屋フィルハーモニー交響楽団創立30周年記念として、「路」シリーズをモデルに琴と管弦楽のための交響曲が作曲され、サントリーホールで上演される。
- 1998年 10月、「平松礼二展」（台湾・高雄市立美術館、翌年1月に台北市立美術館に巡回）。
箱根芦ノ湖成川美術館、韓国光州・ソウルジャソウィーク、また群馬・

- 以後韓国語も修得する。
- 1973年 4月、横山操が没する。失意のあまり、それから2年間制作を中断。
室内装飾の仕事に携わる。
- 1975年 11月、銀座・同和画廊で個展「近江京とその周辺」を開催。
- 1976年 4月、創画会（日本画家十数人によって1948年に創立されたグループ）主催の春季創画展（京都市美術館）に《信仰の山に向かって血》を出品し、初入選する。
- 1977年 春季創画展に《路A》と《路》を出品し受賞、「路」シリーズがはじまる。
10月、創画会のメンバーとなる。
- 1979年 中日新聞・東京新聞夕刊に連載された三浦昇作「やまとたけるの物語」の挿画を担当。
この年次男礼が心臓の手術を受けたことを機会に名前を「礼二」と改名。
11月、第1回中日大賞展（名古屋博物館）に《路―冬日》を出品。大賞を受賞する。
- 1980年 3月、第2回東京セントラル美術館日本画大賞展に《路―冬日》、《路―冬土》を出品し、優秀賞を受賞する。
- 1981年 6月、個展「土―つち」（銀座・資生堂ギャラリー他）を開催。
2月、第6回山種美術館賞展に《シンジユ・トウキョウ・JAPAN》を推薦出品。
- 1982年 東京都美術館にて開催された第9回創画展に《家―P市凍日》を出品。
- 1983年 3月、銀座・セントラル絵画館にて個展「路―木祖路」を開催。
- 1984年 3月、「太田道灌」（三浦昇作、東京新聞夕刊連載）の挿画を担当。「横の会」結成に参加。1986年から1993年まで、同グループによる横の会展に出品。
- 1985年 十八会のメンバーとともに中国に取材旅行。
北京、西安、昆明を訪問する。
- 1986年 3月、個展「路・詩の季」（有楽町・西武アートフォーラム）を開催。
これより大型作品を手がけはじめる。

- 1999年 「印象派・ジャボニスムの旅 平松礼二展」（日本橋・高島屋、松坂屋美術館他）。東京・芝増上寺の天井画を制作。
- 2000年 1月号から2010年12月号まで月刊「文藝春秋」の表紙画を担当する（11年間）。第12回MOA岡田茂吉賞大賞を受賞。
- 2001年 山中湖高村美術館10周年記念・平松礼二展。名古屋・中日劇場の新緞帳の原画《モネの池に桜》を制作。
- 2002年 防衛大学校創立50周年記念のステンドグラス《若人の城》を制作。
奈良薬師寺の天井画を制作。「睡蓮ジャボニスムⅡ 平松礼二展」（ギャラリー白石他）。東海テレビ文化賞を受賞。「平松礼二展」（栢崎市ソフィアセンター）。
- 2003年 「Ador.その色と形―ジャボニスムⅢ 平松礼二展」（日本橋高島屋他）。岡山・天満屋本店、名古屋・古川美術館にて個展。
- 2004年 「千住博+平松礼二 二人展」（盛岡）。愛知大学創立50周年を記念して車道キャンパスのホールにステンドグラス《日本の新しい朝の光》を制作。
6月、「遙かなる旅路 平松礼二展」（豊橋市美術館他）。「文藝春秋表紙画を中心に―平松礼二展」（山種美術館）。
第57回中日文化賞受賞。
- 2005年 3月、多摩美術大学教授を退任。客員教授となる。日本・ベトナム文化交流政府代表ミッションとして訪越。「名鉄百貨店創立50周年記念 ジャボニスムの故郷 平松礼二展」（名鉄百貨店）。
- 2006年 4月、学校法人了徳寺大学学長に就任（2008年まで）。「平松礼二展 印象派・ジャボニスムの旅」（酒田市美術館）。
町立湯河原美術館に平松礼二館が開館。
- 2007年 「平松礼二展―美しの國を往くⅣ」（日本橋・三越他）。
- 2009年 個展「平松礼二展―ジャボニスムへの旅」（しもだて美術館）。
銀座・ギャラリー桜の木にて個展。
- 2011年 「美の巨人・平松礼二展」（箱根芦ノ湖成川美術館）。
- 2012年 「あぐら富士山Japan―平松礼二展」（P・YOSHII GALERIE）。「画家50年の軌跡 平松礼二展」（名古屋美術館）。
- 2013年 「平松礼二展―日本の美を求めて」（岡山・新見美術館）。
箱根芦ノ湖成川美術館にて個展。
7月、ジヴェルニ―印象派美術館で「平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ」開催（〜10月31日）。

高まる期待、 国際市場での 平松芸術への評価

冒頭でも触れたように今回のジヴェルニー印象派美術館での平松礼二展は、フランスの公立美術館への現存日本画家の個展招致という点で稀だが、何より1点(『ジベルニー モネの池・風音』六曲一雙屏風 愛知県刈谷市美術館寄託)を除く出品作すべてが新作かつ美術館買上げという異例の扱いが注目される。そうした事実が何を物語るのか。その答えを求めるのは早急に過ぎるが、19世

紀後半のヨーロッパで多くの画家たちを魅了した「ジャポニスム」を独自の視線から探求し昇華した平松ワールドが、印象派誕生の地でこれまでとは別次元の評価を獲得しつつあることは間違いないさそうだ。

例えば展覧会開催前日の7月12日に行われたプレスレビューには、フランスはもとより内外のマスコミ50数社が参加、さらに作家への個別取材

も後を絶たず、ヨーロッパ各国の平松展への関心の高さを示した。また、プレスレビューに続くオープンングパーティ会場では、早くも現地のコレクターから作品入手に関する質問が数多く寄せられ、さらにドイツの国立美術館から展覧会開催への打診があったことなども明かされるなど、日本画家から世界のHIRAMATSUへの飛躍が予感される。

そしてそれは、これまで多くの日本人作家が夢見つつ成し得なかった国際的な市場評価の確立をも意味しよう。振り返ってみれば、今日、世界のマーケットで通用する日本人画家といえ、エコール・ド・パリの寵児として活躍した藤田嗣治、旧き良きパリの街並みをドキュメントした荻須高德、また近年では現代美術の草間彌生、村上隆、奈良美智らがオークションアイテムとして認知される程度。それだけに今回の平松展のインパクトが、今後、フランス内外のアートディーラー、コレクターらに及ぼす影響は少なくないだろう。

かつて国内の現代美術大手への取材時、「今日、欧米の画廊が扱う作家の基準は、美術館での企画展、あるいは作品収蔵の有無で決まる」との言葉を思い出した。また、美術市場の動向に詳しい総合美術研究所所長・桂木紫穂氏に日本人作家の国際性について聞けば「海外で最初に評価された日本人作家は、江戸時代の浮世絵師たちです。明治の美術商、林忠正が積極的に欧米に作品を大量に輸出して、大いに注目を浴びました」としながら「それはさておき、現在でも、海外のオークションで最も頻繁に取引されている日本人画家は、藤

田嗣治です。若くしてパリに渡り、独自の技法を編み出し、画廊と契約をして展覧会を開き、有力美術団体の会員になるなどの努力を重ねながら、愛好家、コレクターが増えて行くのです。当然のことながら、評価が高まり、市場価格も上昇します。同じことは、長らくパリで暮らした長谷川潔と荻須高德にも言えます。要するに海外での評価は、作品のオリジナリティー、展覧会歴、画廊のプロモート、批評家の批評、コレクター層の厚さなどが連動して生まれるのです」と語る。

そんな桂木氏の指摘は今後の平松芸術の国際的評価への可能性を示唆しているようでもあり、興味深い。日本国内ではすでに昨年末から個展や制作依頼が相次ぎ、計画中の展覧会以外は対応が難しいという平松氏。9月15日にはNHK日曜美術館での特集オンエアも予定され、国内愛好家の関心もヒートアップ必至だろう。なお、ジヴェルニー印象派美術館での展覧会とインタビューの模様はYouTube (Reiji Hiramatsu) にもアップされているのでぜひアクセスを。(編集部F)



ジベルニー モネの池・風音 六曲一雙屏風(部分)



《平松礼二・睡蓮の池・
モネへのオマージュ》
Musée des Impressionnistes de Giverny
“Hiramatsu, le bassin aux
nymphéas. Hommage à Monet”
会期 開催中～10月31日
会場 フランス・ジヴェルニー
印象派美術館
<http://www.mdig.fr/>

今回の展覧会および今後の平松礼二
に関する展覧会・作品依頼についてのご
相談は下記のとおり。

平松礼二展実行委員会 (S&D)
〒171-0021
東京都豊島区西池袋 2-36-1-510
Tel. 03-5992-2002
Fax. 03-5396-5500
<http://www.reiji-hiramatsu.com>